HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コルチャックの思想および養育実践に関する研究の成果と課題
Author(s)	大澤, 亜里
Citation	教育福祉研究, 20, 135-148
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58354
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN10264662_20_135-148.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

コルチャックの思想および養育実践に関する研究の成果と課題

大　澤　亜　里

はじめに

ポーランドにおけるコルチャック研究の第一人者であるレヴィン（Lewin, A. 1915-2002）は、コルチャックの養育実践に関するこれまでの研究は、それを「静的」に「把握」しているだけだと指摘する。それはこれまでの養育実践に関する研究が依拠してきた二つの史料、コルチャック著 *Jak kochać dziecko. Internat, Dom Sierot*（子どもをいかに愛するか―養育施設編、ドム・シエロット編）（1920 年）およびファルスカ[1]著 *Zakład Wychowawczy „Nasz Dom”*（養育施設〝ナシュ・ドム〟）（1928 年）に起因するという。レヴィンによれば、これら二つの史料は、「コルチャックの養育システム（ポーランドでは、孤児院ドム・シエロットおよびナシュ・ドムにおける養育実践のことをこのように呼んでいる：大澤）―の原則はどのようであり、どのような養育テクニックが用いられていたのかを明らかにしている」（Lewin 1999: 260-261）。しかし、これらは養育システムを「静的」に「叙述」したものであり、それぞれの「孤児院の歴史」や、「その（養育システムの：大澤）発展」、「実際の生活」の様子については描かれていない（Lewin 1999: 261-262）。したがって、これら二つの史料に依拠してきたこれまでの研究はコルチャックの養育実践を「静的」に「把握」しているだけだというのである。

筆者はポーランドでのコルチャック研究を経て、これと同様の感想を抱いた。コルチャックが院長を務めたユダヤ系の孤児院ドム・シエロット（孤児の家、1912-1942 年）およびファルスカが院長を務め、コルチャックが共同運営者兼専属医として関わったポーランド系の孤児院ナシュ・ドム（私たちの家、1919-1945 年）において実践された様々な養育的取り組み―レヴィンのいう養育テクニック―については明らかにされている。しかし、それらが実際どのように行われていたのかを描いた研究や、それらが時代とともに変化したのかといった問題を取り上げた研究はなかった。筆者の関心は、コルチャックが実際に子どもたちとどのように関わっていたのかというところにあったが、それに答える研究がなかった。このことが帰国後もコルチャックの養育実践に関する研究を継続していく動機となった。

本論文はコルチャックの養育実践に関する研究の課題を明確にすることを目的とする。第 1 章ではポーランドおよび日本のコルチャック研究にはどのようなものがあるか概観する。そこで明らかにされるように、日本のコルチャック研究のほとんどは思想に関するものである。そこで第 2 章では日本の先行研究が明らかにしてきたコルチャックの思想について整理する。そして第 3 章でポーランドおよび日本におけるコルチャックの養育実践に関する研究の到達点を示し、今後の課題について検討する。

1．コルチャック研究の概要

（1）ポーランドのコルチャック研究

コルチャックが孤児院ドム・シエロットの子どもおよび養育者たちとともに、ホロコーストの犠牲となった第二次世界大戦が終わってから現在に至るまで、本国ポーランドでは数多くの研究が行われてきた。戦後は、コルチャックと直接関わりのあった人物を中心に、彼の生涯に関心を寄せる人たちによって伝記が執筆出版された。しかし社会主義国ポーランドでは、コルチャックの評価は

社会・政治的影響を強く受け、ある時は偉大な人物として称賛され、またある時は批判にさらされ排斥された（大澤 2012）。1978 年、コルチャック生誕 100 周年にあたるこの年を、ユネスコはコルチャック年と定め、国際カレンダーに記録した。これを機にコルチャックに対する関心は一気に高まり、歴史家、文学者、宗教家、評論家、教育学者など様々な学問分野の人たちによって彼の生涯および業績に関する研究が行われるようになった。1989 年、ポーランドの社会主義体制が崩壊し、体制が転換された後は、研究者や作家だけでなく、子どもと関わる仕事に従事する人や大学生などコルチャックに関心を寄せる様々な人たちによって、彼の生涯や思想、実践や文学作品などに関する研究が多数行われるようになった。また 1992 年以降、コルチャック全集の編集・出版が開始され、研究環境が整えられてきたこともこれを後押ししている。では具体的にどのような研究が行われてきたのだろうか。

コルチャック研究の中でもっとも多いのは伝記研究である。伝記的書物の多くは彼の全生涯について書かれているが、ゲットーで過ごした人生の最期だけを対象としているものもある。最初のまとまった伝記的書物は、1949 年に出版されたモルトコヴィチ・オルチャコーヴァ（Mortkowicz-Olczakowa, H.）によるものである。彼女はコルチャックの著作のほとんどを世に出した出版社の娘であり、コルチャックを直接知る人物の一人である。モルトコヴィチ・オルチャコーヴァによる伝記はその後何度も再版され、現在でも頻繁に引用されている。また最新の伝記的書物としては、モルトコヴィチ・オルチャコーヴァの娘であり、劇作家のオルチャク・ロニキエル（Olczak-Ronikier, J.）によるものがある（Olczak-Ronikier 2011）。数多くの伝記の他に、ドム・シエロットの教え子や実習生および養育者、またコルチャックの知人・友人らによる回想録が 1989 年に出版された（Barszczewska, Milewicz 1989）。

伝記研究に次いで多いのは、教育家コルチャックに着目した研究である。その中でも特に、コルチャックの教育（養育）思想や子ども観、教師・養育者観、家族観など、教育家としての彼の思想に着目したものが多い。これらのほとんどはコルチャックの著作を引用しながら彼の思想について論じている。また 3 章で詳しく見ていくが、彼の養育実践に関する研究も少なからずある。その他、コルチャックの教えにならった実践報告や当時の教育家―たとえばマカーレンコやフレネなど―と比較する研究なども行われている。

また、作家としてのコルチャックの業績に関する研究も多く、それらは彼の児童文学作品―最も頻繁に取り上げられるのは *Król Maciuś Pierwszy*（王様マチウシ 1 世）―や小説、詩、脚本などといった著作の特徴や教育的価値、道徳観などについて論じている。その他、医師としてのコルチャックに着目した研究や、彼の宗教性に着目した研究などもある。

これら自らの経験やコルチャックを知る人たちの証言、数多くのコルチャックの著作やその他あらゆる史料を用いながら長年にわたって行われてきた研究の蓄積により、コルチャックの生涯は詳細に明らかにされ、彼の思想や業績に対する理解も深まっている。しかしコルチャック研究の第一人者であるレヴィンが、自身の研究の集大成ともいえる著書 *Korczak znany i nieznany*（既知の、そして未知のコルチャック）（1999 年）を通して指摘しているように、まだ明らかにされていない問題が多数残っている。

（2）日本のコルチャック研究

コルチャックに関する著作が日本で初めて発表されたのは 1978 年のことである。コルチャックの生涯および児童文学作品に魅了された劇作家の大井数雄が、その紹介を試みた（大井 1978 年）。その 10 年後、コルチャックの代表的な児童文学作品 *Król Maciuś Pierwszy*（王様マチウシ 1 世）の翻訳本が出版され、作家としてのコルチャックが日本で知られるようになった（中村 1988）。

1990 年代には近藤二郎および近藤康子らによる伝記、またアメリカのジャーナリストであるリフトン（Lifton, J.B.）や、ウィーン生まれの児童

文学作家であるペルツ（Pelz, M.）による伝記の邦訳が出版され、教育家および孤児院ドム・シエロットの院長としてのコルチャックに関心が集まった（近藤二郎 1990、近藤康子 1995、リフトン 1988、ペルツ 1994）。また近年では 1989 年に採択された国連子どもの権利条約の成立に影響を与えた人物としても注目され、コルチャックの生涯および思想と国連子どもの権利条約との関係に着目した著書や論文がいくつか発表された（西井 1991、樋渡 1994、新保 1996、他）。これらは概して上記の伝記を手がかりに、コルチャックの思想がいかに子どもの権利条約に反映されているか論じている。

このように日本で出版された数少ない著作―そのほとんどが伝記―に基づいてコルチャック研究が行われる一方で、塚本智宏、石川道夫、小田倉泉は、直接コルチャックの著作―ロシア語、ドイツ語、英語に翻訳されたものも含む―を読みながら、また日本国外における先行研究の成果を踏まえながら、コルチャックの思想に関する研究を継続して行っている。そこで次章では塚本、石川、小田倉の研究によって明らかにされてきたコルチャックの思想について整理する。

2．日本の先行研究が明らかにしてきたコルチャックの思想

（1）コルチャックの子ども観

塚本、石川、小田倉の三者は、コルチャックには、〝子どもはすでに人間〟であり、〝尊重に値する〟という認識があると指摘する（塚本 2004 他、石川 1997a、小田倉 2005）。これはコルチャックが医学部生であった 1899 年に、雑誌『みんなの読書室（Czytelnia dla wszystkich）に掲載された論文「19 世紀隣人愛思想の発展（Rozwój idei miłości bliźniego w XIX wieku）」の中の、「子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間である」（Korczak 1899: 226）という主張、また「貧しい人、女性、子どもを尊重せよ」（Korczak 1899: 224）という主張に端を発している。

塚本は、この〝子どもはすでに人間である〟―ここには「尊重されてしかるべきとの意味を含む」と塚本は解釈する―という認識は、コルチャックの子ども観において「最も重要なテーゼ」であり、その後も「彼の思想のほぼ中心に位置し続け」、「新たな思想・概念を伴いながら深化、拡張させられていく」と指摘する（塚本 2011：36-37）。そして、この子どもの中に〝人間〟を見るというコルチャックの態度は、スペンサーやペスタロッチ、フレーベルといった先行する教育家たちから学び、継承したものであり、当時の新教育の流れに沿ったものであったと述べる（塚本 2011：37-38）。しかし、例えばルソーのように子どものなかに子どもを見るのではなく、人間を見ていた点にコルチャックの独自性があったと分析する（塚本 2011：40）。

このようにコルチャックは小児科医として、また孤児院の院長として子どもたちと本格的に関わり始める前から、子どもの中に人間を見出し、子どもを人間として尊重することを訴えていた。そして小児科医時代には胎児や乳児の中にも人間を見ることになる。コルチャックは日々子ども（胎児および乳児も含む）を観察しながら、子どもは一個の人格をもち―それゆえ母親の胎内にいる時でさえも母親の所有物ではない―、人間としての感性と知性と経験をもって生きていることを見出した（塚本 2007b、小田倉 2005）。それゆえ子どもは人間的な価値としては大人と同等であると主張する。しかしコルチャックは、子どもは「感性の分野では私たち（大人：大澤）に優って」おり、「知性の分野では少なくとも私たちと同等」であり、「経験だけが不足」していると述べる（Korczak 1918: 71）。塚本によれば、これはつまり子どもは大人とは質の異なる人間であり、別の方法で生きているということであり、これら子どもの人間の特質や生き方をその違いのままに尊重することをコルチャックは要求していた（塚本 2007b）。石川によれば、コルチャックは子どもは〝すでに人間〟であり、「人間としての尊厳と敬意を払われるだけの資格」を持つと主張していた（石川 1997a：105）。小田倉も同様に、胎児の時ですら子どもは母親から「独立」した人間であり、「すべての人間

に共通する自覚的かつ自律的性質」をもって生きていることをコルチャックは見出したと述べる（小田倉 2005：77-81）。

また小田倉は、コルチャックは無神論の家庭に育ち宗教とは無縁であったが、彼の子ども観にはユダヤ教思想が影響していると指摘する。ユダヤ教思想において、子どもは個として尊重され、「愛情と誠心誠意の注意を払って保護されるべき」存在であるという。また子どもは幼いほど純粋であるが、生まれつき完全な善ではないというのがユダヤ教思想における子ども（人間）観である（小田倉 2002：32、2005：38）。一方コルチャックは、子どものあるがままの姿を尊重し、子どもを大人に優るすぐれた存在とみなしているが、子どもは完全に善ではなく「悪へと走る」こともあるということを認めていた（小田倉 2002：34、小田倉 2005：39-40）。ここからユダヤ教思想における「人間の本性を完全な悪としないまでも、〝悪〟を犯しうる存在とする人間観、子ども観は、コルチャックの子ども観の基本に通ずる」と分析する（小田倉 2005：39）。

塚本、石川、小田倉は共にコルチャックには「私たち（大人：大澤）は子どもを知らない」（Korczak 1920a: 145, 214）という認識があったと指摘している。そこで三者がそれぞれこの認識についてどのように解釈しているか順にみていく。塚本によれば、コルチャックは小児科医時代に身につけた慎重な観察を通して「子どもの中に我々大人が〝知らない〟（知ろうともしてこなかった）人間的なもの・人間にとって価値あるものを探求していた」（塚本 2006a：33）。そして「子ども＝人間」を知ろうとするときには「謙虚」であるべきだと考えていたと塚本は述べる（塚本 2006a：33）。石川は、コルチャックは「教育学的な実践の出発点」を〝私たちは子どもを知らない〟という信念に置いていたと指摘する（石川 1997a：101-102）。小田倉は、この認識が彼の子ども観の根底にあったと述べる（小田倉 2005：72）。そしてコルチャックは子どもを「見失われていた」もの、「その真の存在を知られていなかった」ものとして捉えており、「おとなの問題や紛争が渦巻く中で放置されている〝子ども〟という階級を見出した」と述べる（小田倉 2005：73）。また彼は「徹底的な観察」を通して未知の子どもを知ろうとしていたと指摘する。しかし子どもの世界は「深遠」であるがゆえ、完全に知ることはできず、常に子どもを探求すべきだと考えていたと小田倉は述べる（小田倉 2005：148）。

以上に見てきたように、コルチャックの子ども観について、子どもはすでに人間であり、尊重されてしかるべき存在であること、しかし大人とは質の異なる人間であり、私たち大人は子どもを知らないということ、それゆえ観察によって子どもの世界を探求することが必要だと考えていたことが明らかにされてきた。そして次節で見ていくように、この子どもはすでに人間であるというテーゼから、子どもが人間として当然に与えられるべき権利についての考えが出てくる。

（2）コルチャックの子どもの権利に関する思想

塚本、石川、小田倉の三者は、コルチャックが「自由のマグナカルタ」と呼ぶ「三つの基本的な」子どもの権利に着目している（Korczak 1918: 43）。この「三つの基本的な」権利とは、コルチャックの代表的な教育学的著作『子どもをいかに愛するか―家庭の子ども編（Jak kochać dziecko. Dziecko w rodzinie）』（1918 年）の中で主張されている、「子どもの死に対する権利」、「今日という日に対する子どもの権利」、「子どものあるがままで存在する権利」である（Korczak 1918: 43）。塚本はこれを「大人と子どもの関係において深く考えぬかれた〝子どもの権利〟論」であり、コルチャックの子どもの「権利思想を支える際の重要な源泉」であり、そして「子どもの生、生活、一生の様々な場面においてそこなわれている〝子どもの権利〟のもっとも核心的な部分」であると評価する（塚本 2004：62）。また小田倉は、コルチャックの「思想において極めて重要な〝3 つの基本的〟権利」であると述べる（小田倉 2005：81）。このようにコルチャックの権利思想の中で中心的な位置を占めるとされているこの三つの権利は、それぞれ次の

ように解釈されている。

一つ目の「子どもの死に対する権利」には、二つの意味があるといわれている。一つは、「早すぎる死に対する権利」で、もう一つは、「あらゆる経験」をしながら「生きる」権利である（Korczak 1918: 43-46）。前者について、小田倉は、「たった一度か三度の春」を見て人生を終える（Korczak 1918: 43-44）ような、避け難い死を受け入れることが、「子どもの短い生を十分に保障する」ために必要であると解釈する（小田倉 2005：86）。後者は子どもの死を恐れるあまり、あらゆる経験を回避するのではなく、「子どもの生き生きとした生を保障」し、様々な「危機を乗り越える力を養うことを保障」するために、その時々の成長に必要な経験をさせることが重要であるというものである（小田倉 2005：86）。塚本と石川も同様の解釈で、塚本は、コルチャックには「その時点、その年代において成長させ・成熟させることが重要だという認識がある」と述べる（塚本 2004：62）。

二つ目の「今日という日に対する子どもの権利」について、塚本は「第三の権利と並ぶもっとも重要な思想」であると評価する（塚本 2004：65）。小田倉も同様に、この第二および第三の権利は、コルチャックの基本テーゼである「子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間である」という主張に基づくものであると述べる（小田倉 2005：89）。ではコルチャックはどのような理由でこの権利を主張したのだろうか。コルチャックによれば、私たち大人は子どもを「今は存在しないが、いつか存在する」ものとして見ており、「今は知らないが、いつか知る」ようになり、「今はできないが、いつかできるようになる」（Korczak 1918: 46）と考えていると塚本は述べる。そして「明日のために、今日子どもが喜んだり、悲しんだり、驚いたり、怒ったり、興味をもったりすることを軽視している」と彼は批判する（Korczak 1918: 46）。つまりこの権利を主張する背景には、大人は子どもに「明日の人間の任務という重荷を課し、今日（を生きる：大澤）人間の権利を与えていない」ことに対するコルチャックの批判があると塚本は述べる（塚本 2004：65）。石川によれば、コルチャックはこの権利の主張を通して、「子どもの独自の見方や欲求を承認し、それぞれの年齢に見合った権利、義務を認め」ることを大人に要求している（石川 1997a：108-109）。小田倉は、コルチャックの時間という概念に着目しながら、以下のように解釈する。コルチャックは将来よりも現在を重視しており、「〝現在〟を十分に生きることだけが、明日訪れる〝現在〟をも充実させるために必要であると主張している」と（小田倉 2005：88）。そして「この〝現在〟への強い執着とその価値への主張」が第二の権利を導きだしたと述べる（小田倉 2005：89）。

三つ目の「子どものあるがままで存在する権利」は、塚本によれば、「子どもは、自ずと、然るべく成長するときに、強く確かで十分なもの」になるのであって、「大人（親）の先々への何かの幻想や過剰な期待によって子どもを仕込んだり圧力をかけたり強制することによって」達成するものではないということを意味する（塚本 2004：67）。そしてこの権利の主張は、「過剰な期待をする親たちに対するコルチャックの痛烈な批判である」と塚本は述べる（塚本 2004：67）。石川は、この権利は「他人と違う自分であること、そうした個性の許容を訴えるもの」だと説明する（石川 1997a：109）。小田倉によれば、この第三の権利は、「今ある子どもの状態、またその時々の状態」をあるがまま受け入れることの必要性と、「個人の独創性と個性の価値」を尊重することの必要性を訴えていると解釈する（小田倉 2005：90-91）。そしてこの権利は、「子どもの尊重とそのすべての権利の保障において極めて重要なものである」と特徴づける（小田倉 2005：92）。

以上のように解釈されている三つの基本的な子どもの権利を、塚本は「子どもが子どもであることによって阻害されている人間としての権利」であるとする（塚本 2004：70）。小田倉もこのように評価したうえで、「人間に与えられるべき権利であるにもかかわらず、子どもに与えられていない権利を主張することによって、子どもが〝すでに人

間であること〟を繰り返し訴えている」と述べる（小田倉 2005：95）。このようにコルチャックの子どもの権利思想の根底には、彼の子ども観の中心テーゼ「子どもはすでに人間である」という認識がある。

塚本は、この「三つの基本的な」権利の他に、「主体的な子どもの権利」に関しても言及している。その内、1920 年に出版された『子どもをいかに愛するか―養育施設編（Jak kochać dziecko. Internet）』の中で主張された、子どもが「望み、願い、要求する権利」そして「成長し、成熟する権利、成熟して果実を生み出す権利」（Korczak 1920a: 147）について、塚本は、まず子ども自身が発する「望み、願い、要求」に耳を傾けること、その上で、子どもが「成長し、成熟する権利」と「成熟して果実を生み出す権利」を保障することをコルチャックは大人（社会）に要求していると説明する（塚本：2004：72）。また同著書のドム・シエロット編の中で主張された、「自分の問題が真剣に取り扱われ、公正に熟考される権利」（Korczak 1920b: 297–298）は、ドム・シエロットにおける〝仲間裁判〟をはじめとする養育実践およびそこでの観察に裏づけられた子どもの権利であると説明する（塚本 2004：74）。さらにコルチャックのもう一つの代表的な教育学的著書『子どもの尊重される権利（Prawo dziecka do szacunku）』（1929 年）では、子どもの「疑いや疑義」（Korczak 1929: 432）、「意見」を「大人は聴き入れるべき」（Korczak 1929: 435）であること、そして子どもは「子どもの〝組織〟と子どもの運命に関わる〝識者〟（Korczak 1929: 446）」として大人社会に参加すること、つまり「主体的な子どもの権利」を、コルチャックが要求していると述べる（塚本 2004：81）。以上にあげた権利を含め、コルチャックが子どもの権利として主張したものを、塚本はリストにしている（塚本 2008–2010：2009、 7 、42–45）。

塚本が「主体的な子どもの権利」として言及しているものを、小田倉は「市民としての権利」と呼んで考察している。小田倉によれば、コルチャックは子どもを「市民」として位置づけることで、大人と同じ権利を有する人間であることを主張している（小田倉 2005：100）。そして子どもは「市民」として、自分に関わる事柄に関して意見を述べる権利を持つこと、その子どもの意見は取り入れられるべきであること、つまり、「施策において反映される権利」をコルチャックは要求していると述べる（小田倉 2005：102）。そしてこのような「市民としての権利は、子どもを社会の成員として〝生かす〟、言い換えれば子どものあらゆる能力、自主性、自発性などを発揮するための機会を提供するものである」と説明する（小田倉 2005：102）。

「三つの基本的な」権利をはじめとして、子どもの権利に関する主張を通してコルチャックが目指したのは、塚本によれば、「まずは、無権利状態の子どもが大人と対等な関係になるよう昇格させるべく子ども（の権利）を人間として尊重すること」、そして「大人と子どもが相互の権利を互いに尊重しあい、共存する」ことであった（塚本 2004：83–84）。そのためにはまず「大人社会が子どもを尊重し信頼すること」が必要であり、その先にコルチャックは「〝子どもの権利宣言〟の成立を展望していた」と塚本は述べる（塚本 2004：85–86）。これらコルチャックの子どもの権利思想は、次節以降で見ていく教育思想に反映されている。

（3）コルチャックの教育思想

先行研究ではコルチャックの教育思想や教育学、またこれらの根底にある子ども観は、新教育運動の影響を受け、それと多数の類似点を持っていること、しかし完全にその中に位置するわけではないことが指摘されてきた（塚本 2011、石川 1997a、小田倉 2005）。そこで本節ではコルチャックの教育思想、教育学はどのような特徴をもつものだといわれているのか見ていく。

石川は、小児科医として病院で働いた経験がコルチャックの教育に対する態度に大きく影響していると指摘する（石川 1997a：98、100）。そして「教育学的な実践の出発点」を、「私たちは子どもを知らない」という信念に置くがゆえ、彼は「医学の世界と同様、教育学でも観察、説明、関連づけ、推論などに基づいた教育的行為の診断学を確立」

しようとしていたと述べる（石川 1997a：102）。

また石川は、コルチャックは「命令」や「規律」、「管理」によって高い目標や理想に向けて引っ張っていくような既存の教育に対して批判的であったと指摘する。石川によれば、コルチャックの教育学の根幹には、「子どもはすでに人間」であり尊重に値するという認識があった（石川 1997a：104-105）。それゆえコルチャックが目指したのは、「教育を通して初めて人間になるのではなく、当初から人間としての完全な価値を有した子ども」を、「あるがまま、見えるがままの存在として、良い面も悪い面も、すべてトータルに考え」承認することであった（石川 1997a：106、109）。しかしだからといってコルチャックが反教育学に与するわけではなく、「個々の実践の積み重ねのなかで、子どもに自立や自己決定の余地を提供することを要求し、自分を発見し、自分の意思を実行し、自由や自律の行使を援助することを教師の使命」と考えていたとコルチャックの教育学を特徴づける（石川 1997a：110）。

石川と同様に小田倉も、小児科医としての経験がコルチャックの教育思想の形成やその研究方法の確立に影響していると指摘する（小田倉 2005：145）。その中でも特に医学で身につけた徹底的かつ綿密な観察によって未知なる子どもを知り理解しようとしていたこと、つまり観察という子どもを探求する方法を獲得したことを強調する（小田倉 2005：145-149）。

小田倉は「コルチャックの教育に対する高い理想」として、次の二点をあげている（小田倉 2005：149）。一点目は、教育を通して世界を改善すること―石川も同様に、「教育を変えていくことで世界を改革」するというコルチャックの願望について指摘している（石川 1997a：99）―、二点目は、頽廃した大人社会から子どもを保護することである（小田倉 2005：149）。小田倉によれば、コルチャックの教育体系の中心にはあるがままの子ども一人ひとりがおり、それぞれの子どもの現在の生に責任を負うこと―つまり、あるがままの子どもの今日という日を保障すること―が教師の役割であった。今日という日の保障は、つまり「幸福な子ども時代」を保障することであり、ここに二点目にあげた教育の役割を小田倉は見出している（小田倉 2005：151）。また一点目に関しては、「既成の価値体系の教授」ではなく、子ども自身がそれぞれの経験を通して価値観を形成していくことで実現しようとしていたと指摘する（小田倉 2005：149-152）。

また小田倉は、日本国外の先行研究をもとにコルチャックの教育学を「尊敬の教育学」と呼んで特徴づける。これは「個人の価値が最大限に尊重される教育学」であり、「教師と子どもとが互いの人間性の尊厳を尊重する関係によって成立」するものであるという（小田倉 2005：153）。そしてこのような関係を築くためには「従来の権威主義的な」関係、つまり「子どもの存在の在り様自体を否定し、教師に対する子どもからの尊敬を求め」るのではなく、まず教師が子どもを尊重することが必要だとコルチャックは考えていたと小田倉は述べる（小田倉 2005：153）。この子どもへの教師の尊敬には「子どもへの信頼と理解と愛情」があり、それがコルチャックの教育学の基本であると指摘する（小田倉 2005：155）。

これら石川および小田倉の研究から、コルチャックの教育思想、教育学の特徴として以下の点があげられる。第一に、小児科医としての経験が彼の教育思想および方法に影響を与えた、特に観察という子ども探求の方法を身につけた点である。第二に、既存の教育を厳しく批判し、「子どもはすでに人間である」―したがって教育によって人間になるのではない―という認識のもと、子どものあるがままを承認し、尊重することを教師に要求した点である。第三に、頽廃した大人社会から子どもを引き離し、子ども（時代）の生を保障すると同時に、その社会を改善するというところに教育の意義を見出していた点である。

3．コルチャックの養育実践に関する研究の到達点と課題

（1）ポーランドにおける養育実践研究

冒頭で述べたように、レヴィン―1937 年から 1939 年にかけてドム・シエロットで働いた経験があり、戦後はコルチャック研究の第一人者として多くの著作を発表し、長年にわたりコルチャック選集および全集の監修を務めた―は、これまでの養育実践に関する研究はそれを「静的」に「把握」しているだけだと指摘する。ではレヴィンが「静的な把握」と特徴づけるこれまでの研究はどのようなものだったのだろうか。以下では養育実践に関する研究の内、それを全体的かつより詳細に明らかにし、その意義を検討しているヤクボフスキとマティヤスの研究を紹介する。

ヤクボフスキ（Jakubowski, M.）は、コルチャック研究の多くが「断片的でジャーナリスティック」なものであり、コルチャックの養育システム―ポーランドではコルチャックの養育実践をこのように呼ぶ―を「きちんと」描いたものはないとして、その全体を詳細に明らかにしている（Jakubowski 1989: 7–8）。彼は養育システムの中の自治組織として〝仲間裁判〟、〝自治評議会〟、〝子ども議会〟を、自己教育のための取り組みとして〝賭け〟、〝早起きリスト〟、〝けんかリスト〟、〝公証（ノート：大澤）〟、〝感謝と謝罪のリスト〟、〝落し物入れ〟、〝投書箱〟、〝思い出〟を、社会的養育的取り組みとして〝世話人システム〟、〝ブルサ（実習生のこと：大澤）〟、〝新聞〟、〝好き嫌いの住民投票〟、〝住民の等級づけ〟、〝掲示板〟、〝お店〟をあげ、またその他に〝係仕事〟や〝責任重大な仕事〟、〝学校の仕事〟といった労働について、それぞれどのようなものであったか、どのような意味があったのかを、コルチャックおよびファルスカの著作をもとに明らかにしている。そしてこれらコルチャックの養育システムには、「診断」、「予防」、「補償」、「修正」という意義があると指摘し、それぞれの意義について考察している。

マティヤス（Matyjas, B.）は、「コルチャックや彼の養育システム、また教育観に関してはこれまでたくさん論じられてきた」が、コルチャックの養育システムにおいて文化的活動（aktywność kulturalna：文化に参加すること）がどのような機能を果たしたのかという問題はこれまでほとんど取り上げられなかったと述べる（Matyjas 1996: 8）。そこでこの養育システムにおける文化的活動について明らかにし、その機能について考察している。マティヤスによれば、コルチャックの養育システムは、認識、感情、身体の発達、また社会文化的発達など、あらゆる領域における「発達の機会や自己改善の機会を子どもたちに保障し、自己教育に向けて準備」した。そして「文化的活動はこの過程において重要な役割を果たした」と述べる（Matyjas 1996: 159）。そして養育システムにおける〝世話人システム〟や〝賭け〟、〝公証（ノート：大澤）〟、〝記念絵はがき〟、〝新聞〟、〝日記〟といった取り組み、その他に毎年行われたサマーキャンプ、祭日や式典に向けての準備、コンサートや演劇などの催しといった取り組みについて言及しながら、これら文化的活動には、「補償」、「治療」、「統合」、「社会化」、「個性化」、「活性化」、「鼓舞」といった機能があると指摘している。

これら養育実践に関する研究では、コルチャックの養育システムの全体像が明らかにされ、その意義が検討されている。しかしレヴィンが指摘するように、これらはコルチャックの著書 *Jak kochać dziecko. Internat, Dom Sierot*（1920 年）およびファルスカの著書 *Zakład Wychowawczy „Nasz Dom”*（1928 年）に依拠しているため、養育実践の「発展」や「実際の生活」の様子については明らかにされていない。レヴィンは、このような「静的な把握」ではなく、ドム・シエロットが存在した 30 年間を通して養育実践がどのように変化したのか、その「複雑なプロセス」を描き出し「より動的」に「把握」することが必要だと述べる（Lewin 1999: 262）。しかし、史料の限界および「より複雑で系統的な方法論」が必要だという理由からこれは容易なことではないと述べた上で、彼は「ドム・シエロットの歴史」と「養育

システムが形成されていく主な段階」[2] を概観するに留まっている（Lewin 1999: 263–285）。

レヴィンがこのように指摘してから 15 年が経過したが、コルチャックの養育実践の変化を明らかにした研究も、ドム・シエロットの歴史や実際の生活の様子を明らかにした研究も出てきていない。

（2）日本における養育実践研究

塚本、石川、小田倉はそれぞれコルチャックの著作の多くは「彼の経験、また、実践に裏打ちされたもの」（塚本 2004：48）、コルチャックの教育学は「経験からくる信念であった」（石川 1997a：101）、孤児院での実践は彼の教育思想の「体現である」（小田倉 2005：177）と指摘する。このように、前章でみてきたコルチャックの子ども観、子どもの権利思想、教育思想は、孤児院ドム・シエロットにおける経験、実践と相互に関係している。しかし実践に関する研究はまだ初期の段階にあり、塚本と小田倉がコルチャックの試みた実践の一部に着目し考察しているだけである。

塚本は、ドム・シエロットにおける「自治システム」の中で、コルチャックが最も重視したものとして〝仲間裁判〟制度を取り上げ、その目的や意義について考察している。塚本によれば、この〝仲間裁判〟の目的は、ドム・シエロットにおける子どもたちの生活をより良くするという目標のもと、「子ども間のトラブルや教育者と子ども間のトラブル」を、公正に解決していくことであった（塚本 2009：46）。またこの〝仲間裁判〟では、仲間の過ちや罪を許し承認し合うこと、犯した過ちや罪を正して成長していける人格として仲間を信頼し合うことがめざされた。このように〝仲間裁判〟は、仲間を許し承認し信頼し合うという「相互の関係を打ち立てながら、自他の尊重」を探求するプロセスであり、「子どもの中の人間を承認し尊重するためのコルチャックの実践的試みだった」と塚本は評価する（塚本 2010：49）。

小田倉は、ドム・シエロットにおける自治組織のうち、「子どもの権利尊重の思想が反映されている組織」として、〝学校新聞〟、〝掲示板〟、〝郵便箱〟、〝仲間裁判所〟、〝子どもたちの議会〟に着目し、それぞれの「教育的意義」を検討している。小田倉によれば、〝学校新聞〟〝掲示板〟〝郵便箱〟には、「子どもたちが〝自分たちに必要なことを言う権利〟をもち、〝子どもの意見〟は取り入れられることを教える」という意義があり（小田倉 2005：116）、〝仲間裁判所〟には、「裁くことよりも、法と個人の権利を尊重することを教えると共に、それによって正義についての考えを伝え、子どもたちが正義に従って行動するよう導く」という意義がある（小田倉 2005：138–139）。また〝子どもたちの議会〟は、「子どもの思考や意見はおとなと比較され得ず、尊厳をもって取り入れられること」を示し、子どもたちが身近なところから自分たちの「日常生活を切り開いていく」上で重要な役割を果たしたと述べる（小田倉 2005：142）。このように説明した上で、これらドム・シエロットにおける自治組織は大人と子どもの同権に基づいており、この同権の体制は「子どもの権利を尊重するための基盤であった」と小田倉は評価する（小田倉 2005：156）。そしてこれら実践の諸組織は、「意見を表明する」権利や「情報を発信する」権利、「自分たちの生活を作り出す権利」といった権利を行使する機会を子どもたちに提供し、こうした権利を享有しているという自覚を各自に促すという意義をもっていたと述べる（小田倉 2005：156–159）。

塚本および小田倉が指摘しているように、〝仲間裁判〟、〝学校新聞〟、〝掲示板〟、〝郵便箱〟、〝子どもたちの議会〟などからなるドム・シエロットの自治組織は、全体として子どもを人間として承認し―つまり、大人と同等であることを認め―、尊重するとともに、子どもの権利を尊重しそれを実現するためのものであった。

（3）今後の課題

前章で見てきたように、日本では塚本、石川、小田倉らによってコルチャックの子ども観や子どもの権利思想、教育思想が明らかにされつつある。またそうした思想でもってドム・シエロットで展開された養育実践については、塚本および小田倉

がその意義を考察している。しかし実践に関する研究はまだ初期の段階にあり、以下にあげる課題が残されている。

一点目はドム・シエロットにおける養育実践の全体像が明らかにされていないことである。塚本も小田倉も実践の自治組織の一部について考察しているだけであり、その他の取り組み、例えば〝係り仕事〟や〝好き嫌いの住民投票〟、様々な〝リスト〟などについては言及していない。筆者はワルシャワ大学で執筆した修士論文 *Teoria i praktyka pedagogiczna Janusza Korczaka-system wychowawczy w Domu Sierot i Naszym Domu*（ヤヌシュ・コルチャックの教育理論と実践―ドム・シエロットおよびナシュ・ドムにおける養育システム）の中で、コルチャックの養育実践の全体像を描き、その意義を検討した（Suzuki 2010）。しかし、それらが実際にどのように機能していたのか、そうした諸々の取り組みを通してコルチャックやほかの養育者、また子どもたちはどのような経験をしたのかといった問題にまでは踏み込んで論じることができなかった。ポーランドにおける先行研究を見ても、養育実践の全体像やその意義についてはこれまで論じられてきたが、レヴィンが指摘するように、実際の生活の様子については明らかにされていない。そこで今後は、塚本、石川、小田倉の研究を通して明らかにされてきたコルチャックの思想を理解するためにも、ドム・シエロットにおける養育実践の全体について、それはどのようなものであり、どのような意義があったのかを描き検討すること、また実践を通して生活はどのように営まれていたのか、それを通してコルチャックや他の養育者、また子どもたちはどのような経験をしたのか―失敗や困難も含めて―といった問題を明らかにすることが必要である。

二点目は養育実践のあり様に影響を与えた運営状況が明らかにされていないことである。塚本、小田倉はともにコルチャックの思想の反映、実現という観点から論じており、それを可能にした、またそれを左右したドム・シエロットの運営状況については触れていない―ポーランドにおいてはレヴィンおよびメルジャンがドム・シエロットの歴史を概観するに留まる（Lewin 1999, Merżan 1982）―。養育実践はコルチャックの考えがそのまま現実のものとなったわけではなく、ドム・シエロットの運営状況、例えば設立および運営母体である孤児救済協会の方針や規模、財政状況、またドム・シエロットの職員および子どもの数や特徴、協会とドム・シエロットの関係といったものの影響を受けながら展開されたと考えられる。筆者はドム・シエロットの設立過程について既に明らかにしたが（大澤 2014）、今後は、設立後の運営について明らかにする必要があると考える。

三点目はレヴィンが指摘するように、これら養育実践に関する研究は『子どもをいかに愛するか―ドム・シエロット編』（1920 年）に依るところが多く、この著作が出版された 1920 年以降、1942 年に至るまで、ドム・シエロットの実践はどのようであったか―それまでと同じように行われたのか、ある要素を取り入れながら展開していったのか、あるいは逆に縮小していったのかなど―は明らかにされていない。またドム・シエロットでの養育実践は、コルチャックが院長になってから突然考え出され実行されたものではく、そこに至るまでの経験、とくに孤児や貧困家庭の子どもたちと関わる中で出てきたものである。しかしそのような孤児院の院長に至るまでの養育実践についてはほとんど明らかにされていない。ポーランドにおいては、コルチャック関係の史資料に詳しいチェシェルスカが、青年期におけるサマーキャンプ（夏季コロニー）での試みがドム・シエロットにおける養育実践の基になったと指摘するが（Ciesielska 1997: 323-324）、それについて具体的に検討した研究は存在しない。そこで筆者は、ドム・シエロットの院長になる以前に参加したサマーキャンプでの実践、中でも特に子ども観察や〝キャンプ裁判〟、〝係り仕事〟、〝好感度評価〟といった取り組みについて、それがどのようなものであり、そこでコルチャックは何を経験したのかを明らかにした（大澤 2011）。今後はサマーキャンプ以

外にも、ドム・シエロットにおける養育実践の基礎となり、それに影響を与えたであろう青年期のコルチャックの経験について、また1912年の設立から1942年まで30年間にわたるドム・シエロットの養育実践の変遷について明らかにする必要がある。

四点目はポーランドおよびワルシャワにおける当時の児童保護問題に関する状況が明らかにされていないことである。コルチャックの思想および実践は、これまで教育という分野で議論されてきた。しかしドム・シエロットがいわゆる学校ではなく孤児院であったこと、つまり孤児や貧困児を保護し育てる場であり、子どもたちにとっては家族以外の仲間と生活(衣食住)を共にする場であったこと、またコルチャックが関わり続け、常に念頭にあったのは、子ども一般ではなく、孤児や貧困児であったことを考慮すると、児童福祉という分野の中でも議論する必要があると考える。またポーランドにおいても、歴史的背景を考慮しながらコルチャックの養育実践を評価した研究はほとんどない。したがってポーランドおよびワルシャワにおける児童保護活動の状況を明らかにしながら、当時の児童福祉および社会の歴史的文脈の中に位置づけてコルチャックの養育実践を評価することが必要である。

以上にあげた課題に取り組むことで、コルチャックの養育実践を、レヴィンが指摘するように「静的」ではなく「動的」に把握できると考える。

注

1）マリア・ファルスカ（Falska, M. 1877-1944）は長年にわたりコルチャックの仕事仲間であった。彼女が院長を務めたポーランド系の孤児院ナシュ・ドムでも、コルチャックの養育システムの原則に基づく養育実践が行われた。

2）レヴィンはドム・シエロットの歴史および養育システムの形成過程を次の5段階にわけて概観している。第一段階：システムの土台の構築(1912-1914年)、第二段階：第一次世界大戦の厳しい試み(1914-1918年)、第三段階：本当に喜ばしい創作(1919-1928年)、第四段階：不況の時期(1929-1939年)、第五段階：絶滅の時代（1939-1942年)。

参考史料

Korczak, J. (1899) Rozwój idei miłości bliźniego w XIX wieku, *Czytelnia dla wszystkich* 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom3-1*, Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1994, 223-227.

Korczak, J. (1918) *Jak kochać dziecko. Dziecko w rodzinie*, 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom7*, Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1993, 7-136.

Korczak, J. (1920a) *Jak kochać dziecko. Internat*, 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom7*, Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1993, 137-219.

Korczak, J. (1920b) *Jak kochać dziecko. Dom Sierot*, 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom7*, Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1993, 269-357.

Korczak, J. (1929) *Prawo dziecka do szacunku*, 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom7*, Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1993, 429-462.

参考文献

荒木寿友（2001）「L. コールバーグと J. コルチャック―ジャストコミュニティの分析を踏まえて」『日本デューイ学会紀要』42、65-70.

石川道夫（1997a）「子どもたちと生きるために―ヤヌシュ・コルチャックの教育論」『教育新世界』23(1)、20-26.

石川道夫(1997b)「教育者コルチャックの祈り―〝ただ一人神と―無信仰者の祈り〟をめぐって」『人間教育の探究』10、87-99.

井上文勝（1995）『戯曲コルチャック先生―ある旅立ち』文芸遊人社.

大井数雄（1978）「ヤヌシュ・コルチャックの現実と虚構―ファシズムに抗したポーランドの児童文学の担い手」『教育』28、118-121.

大澤亜里(2011)「サマーキャンプと青年コルチャック―子ども集団との初めての出会い」『教育福祉研究』

17、37-50.
大澤亜里(2012)「ポーランドにおけるコルチャックに対する関心―戦後から現在に至るまで」『北海道の臨床教育学』1、39-45.
大澤亜里（2014）「コルチャックの孤児院ドム・シエロットの設立と歴史的背景」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』120、53-81.
小田倉泉（2002）「ヤヌシュ・コルチャックの〝子どもの現在〟への一考察」『保育学研究』40(2)、219-226.
小田倉泉(2004)「モンテッソーリと J. コルチャックの子ども存在に関する思想の比較研究」『モンテッソーリ教育』37、59-70.
小田倉泉（2005）『ヤヌシュ・コルチャックの生と教育思想に関する研究―子どもの権利思想に基づく教師教育論構築を目指して』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 2005 年度博士学位論文.
小田倉泉(2007)「乳幼児の意見表明権とその実施に関する一考察―J. コルチャックの権利思想を基として」『埼玉大学紀要教育学部』56、95-107.
小田倉泉（2009）「ヤヌシュ・コルチャックにおけるユダヤ的民族性及び宗教性の検討」『人間教育の探究』21、35-59.
乙訓稔(2009)「子どもの権利論の系譜と展開―E. ケイと J. コルチャックを焦点として」『実践女子大学生活科学部紀要』46、61-71.
桑原和也・甲斐規雄（2006）「ヤヌシュ・コルチャック（Janusz Korczak）についての研究―その生涯・足跡、『子どもの権利に関する条約』の精神的な父の所以」『明星大学研究紀要人文学部』42、179-190.
近藤二郎（1990）『コルチャック先生』朝日新聞社.
近藤二郎 (2005)『決定版　コルチャック先生』平凡社ライブラリー.
近藤康子 (1995)『コルチャック先生』岩波ジュニア新書.
新保庄三（1996）『コルチャック先生と子どもたち―ポーランドが子どもの権利条約を提案した理由』あいゆうぴい.
鈴木秀和 (1996)「ピラーツィク・U. 著『コルチャックのホーム教育学と学校教育学』の翻訳と考察」『哲学と教育』44、25-34.
竹前健治 (2009)「ヤヌシュ・コルチャックと子どもの人権」『文化女子大学長野専門学校研究紀要』1、35-39.
塚本智宏 (1993)「コルチャック著『子どもの権利の尊重』（資料紹介）」『季刊教育法』92、92-108.
塚本智宏（2002）「ヤヌシュ・コルチャック『子どもの権利』の探究」『稚内北星学園大学紀要』2、5-35.
塚本智宏（2002）「教育思想ヤヌシュ・コルチャックの子どもの権利思想―子どもの権利条約の歴史的思想的起源を求めて」『子どもの権利研究』1、31-38.
塚本智宏(2004)『コルチャック　子どもの権利の尊重―子どもはすでに人間である』子どもの未来社.
塚本智宏（2006a）「コルチャック先生〝子ども〟の探究―小児科医であり教育者であること」『北海道子ども学研究』10、31-34.
塚本智宏(2006b)「〝子どもがではない。そこにいるのは人間である〟―コルチャック子どもの権利の尊重」『保育と保健』12、63-65.
塚本智宏（2007a）「コルチャック先生の教育者教育若い教育者へのメッセージ―著作からの抜粋・論文集」『名寄市立大学紀要』1、115-131.
塚本智宏（2007b）「ヤヌシュ・コルチャックの子ども観と子どもの権利尊重の思想―子どもを人間としていかに愛するか」『市立名寄短期大学紀要』40、1-16.
塚本智宏［資料紹介・訳］／鈴木（大澤）亜里［共訳］(2008)「ヤヌシュ・コルチャック著『教育の瞬間』」『名寄市立大学紀要』2、49-95.
塚本智宏 (2008-2010) 連載「コルチャック先生と子どもの権利(1-10、12-15、17、19)」『子どものしあわせ』694-703、705-708、710、712.
塚本智宏［翻訳紹介］／鈴木(大澤) 亜里［翻訳］(2009)「W. タイス著〝ヤヌシュ・コルチャック政治的肖像〟」『名寄市立大学紀要』3、111-122.
塚本智宏(2010)「国際コルチャック会議の開催とコルチャック子どもの権利研究の動向」『人間と教育』68、73-79.
塚本智宏（2011）「ヤヌシュ・コルチャックの子ども・教育思想の歴史的形成（1890-1920 年）―〝子どもを人間として尊重する〟思想の形成を中心に」『名寄市

立大学紀要』5、35-47.
津守真（1989）「ヤヌシュ・コルチャック」『幼児の教育』88、6-14.
津守真(1992)「いつの時代にも：コルチャックの著作を読んで」『幼児の教育』91、4-9.
中村妙子（1988）『子どものための美しい国』晶文社.
中村直樹「児童の権利保障に関する基礎的考察―ヤヌシュ・コルチャックの思想と実践を通して」『東北の社会福祉研究』17-33.
西井のぶ子（1991）「ヤヌシュ・コルチャックの『子どもの権利の尊重』について―『児童権利条約』に関連して」『神戸女子大学教育学科研究会(教育諸学研究論文集)』5、37-48.
樋渡直哉(1994)『子どもの権利条約とコルチャック先生』ほるぷ社.
ペルツ・モニカ著　酒寄進一訳（1994）『コルチャック―私だけが助かるわけにはいかない！』ほるぷ社.
本多英明（2000）「コルチャック先生と20世紀の児童文学」『相模女子大学紀要Ａ人文・社会系』64 A、31-40.
松澤杏（2001）「『子どもの権利条約』についての考察―コルチャックの思想から見た日本の対応の問題点」『人間研究』37、69-77.
ヤヌシュ・コルチャック著／サンドラ・ジョウゼフ編著／津崎哲雄訳(2001)『コルチャック先生のいのちの言葉―子どもを愛するあなたへ』明石書店.
リフトン・Ｊ・ベティ著　武田尚子訳（1988）『コルチャック物語―子どもたちの王様』サイマル出版会.
Barszczewska, L., Milewicz, B. (wyb. i oprac.) (1989) *Wspomnienia o Januszu Korczaku*, Nasza Księgarnia, Warszawa.
Bińczycka, J. (red.) (1999) *Korczakowskie dialogi*, Wydawnictwo Akademickie „Żak", Warszawa.
Bińczycka, J. (red.) (2007) *Prawo dziecka do zdrowia,* Oficyna Wydawnicza „Impuls", Kraków.
Bińczycka, J. (2009) *Spotkanie z Korczakiem*, OSW, Olsztyn.
Ciesielska, M. (1997) Geneza utworów Moški, Joski i Srule, Józki, Jaśki i Franki, Teksty z czasopism 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom 5*, Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa.
Dębnicki, K. (1985) *Korczak z bliska*, Ludowa Spółdzielnia Wydawnicza, Warszawa.
Falkowska, M. (1989) *Kalendarz życia, działalności i twórczości Janusza Korczaka*, Nasza Księgarnia, Warszawa.
Jakubowski, M. (1989) *Klasycy Pedagogiki opiekuńczej tom 1 System opiekuńczo-wychowawczy Janusza Korczaka*, Wyższa Szkoła Pedagogiczna w Częstochowie, Częstochowa.
Jaworski, M. (1977) *Janusz Korczak*, Interpress, Warszawa, wyd. II.
Kirchner, H. (red.) (1997) *Janusz Korczak :pisarz, wychowawca, myślicie*, Wydawnictwo IBL, Warszawa.
Lewin, A. (1999) *Korczak znany i nieznany*, EZOP, Warszawa.
Matyjas, B. (1996) *Aktywność kulturalna dzieci i młodzieży w teorii i praktyce pedagogicznej Janusza Korczaka*, Wyższa Szkoła Pedagogiczna im. Jana Kochanowskiego, Kielce.
Merżan, I. (1982) Zarys dziejów Domu Sierot 所収：*Janusz Korczak życie i dzieło*, Wydawnictwa Szkolne i Pedagogiczne, Warszawa, 84-89.
Merżan, I. (1987) *Aby nie uległo zapomnieniu :Rzecz o Domu Sierot Krochmalna 92*, Nasza Księgarnia, Warszawa.
Mortkowicz-Olczakowa, H. (1966) *Janusz Korczak*, Czytelnik, Warszawa wyd. III.
Newerly, I. (2003) *Rozmowa w sadzie 5 sierpnia*, Czytelnik, Warszawa, wyd. II.
Olczak-Ronikier, J. (2011) *Korczak :Próba biografii*, Wydawnictwo W. A. B., Warszawa.
Suzuki (Osawa), A.(2010) Teoria i praktyka pedagogiczna Janusza Korczaka-system wychowawczy w Domu Sierot i Naszym Domu, Uniwersytet Warszawski Wydział Pedagogiczny, praca magisterska

Szlązakowa, A. (1978) *Janusz Korczak*, WSiP, Warszawa.

Tarnowski, J. (1990) *Janusz Korczak dziesiaj*, Wyd. ATK, Warszawa.

Wołoszyn, S. (1978) *Korczak*, Warszawa, Wiedza Powszechna, Warszawa.

（北海道大学大学院教育学院・博士後期課程）